

基 調 講 演

赤十字から見た人道の世界地図

A World Map of Humanity Seen from the Red Cross

近衛 忠輝 Tadateru Konoe

(日本赤十字社 社長, 国際赤十字・赤新月社連盟 会長, 前日本赤十字学園 理事長)

キーワード：複合危機, 不測の事態, 赤十字の原則

key words : compound crisis, unforeseen circumstances, principles of the Red Cross

1. 赤十字との出会い

半世紀も赤十字で働いているという希少価値を生かして、今日は思い出話も含め、今後の活動の参考になる話をしたいと思う。

1962年、世界に衝撃が走った。アメリカのすぐ目と鼻の先にあるキューバに、当時のソ連がミサイルを持ち込んだ。それに反発するアメリカとの間で、第3次大戦が始まりかねないような一触即発の事態に世界は追い込まれた。当時のアメリカの大統領はジョン・F・ケネディ。大統領になって数年しかたっていないアメリカ史上で最も若い大統領だった。かたや、ソ連はフルシチョフという大変老練な人が書記長をやっていた。ケネディをなめていたか試していたのか分からないが、ともかくミサイルを持ち込んだ。

アメリカは、第3次大戦も辞さない覚悟で撤去を求める。ソ連が結局折れて撤去を決めたが、本当に撤去されたかどうかを検証する方法がない。冷戦時代の国連は東西の陣営に分かれていて、ことごとく対立をする。全ての国がそのどちらかに属しているので、中立の立場で活動できる機関や信頼できる国は存在しなかった。そこでお鉢が回ってきたのが赤十字国際委員会だった。幸い、その出番が来る前にソ連がミサイルを引き揚げたために事なきを得たが、赤十字にはこのような役割もあるのかと学生時代の私は興味を持った。

そして、その年に私はロンドンに留学した。行った先はロンドン・スクール・オブ・エコノミクス。ロンドン大学の1つのカレッジで、実はケネディ大統領

のお父様が駐英大使をされていた関係で大統領も何年間かそこで学ばれた。当時、学生の3分の2は海外からの留学生で、ゼミなどはまるでミニ国際会議のようだった。

この留学中の1963年に、大陸側のヨーロッパの各国を回り、その途中にジュネーブに立ち寄った。そのときの国際機関代表部の日本大使が青木さんだった。初代の外務卿の青木周蔵の孫で、奥様は確かドイツ人だったから、ハーフか4分の1は西洋人の血が入っており、ものすごいダンディーな方だった。その息子さんか例のペルーの日本大使公邸人質事件の主演となった青木さんで、私の中学、高校の1年先輩で同じ新聞部に属し大変親しくしていた。お宅にもたびたび伺ったことがあり、お父様も存じ上げていた。

そこで、貧乏学生なので屋根裏でもいいから泊めてくださいと大使公邸を訪れた。大使は、喜んで泊めてやるけど一つ条件がある。明日、赤十字の創設100周年を祝う行事があり、各国赤十字の代表がナショナルコスチュームを着て国旗を担いでジュネーブの街をパレードする。大使館の若い書記官が出ることになっているけれども代わってやれ、俺の羽織はかまを貸してやるからと。一宿一飯のお世話になるのだから、その役を引き受けなければいけなかった。参加する予定だった菊田書記官は、青少年赤十字のOBだったご縁で、その役割を引受けたと思うが、日赤の社史稿には日赤の代表として菊田さんの名前が出ている。知らないうちに役者がすりかわって影武者の私が出たわけで、大使の羽織はかまを着て日の丸を担いでジュネーブの石畳を歩いたのは痛快な経験であり、これが私と

赤十字の最初の出会いとなった。

そして、間もなく、ジュネーブからロンドンに帰ったところで、ケネディ大統領が暗殺された。ロンドンの町は悲しみに包まれ、アメリカ大使館周辺には大変な人が集まっていて、みな涙を流していた。

この1年数か月後、ロンドンの帰りに、せっかくだから寄り道をして世界をできるだけ広く見ようと3か月近く、あまり人の行かない共産圏の国々や、中東の独立したばかりだったり独立しようとしている国々、アジアの発展から取り残された国々など18か国を見て回った。復帰前の沖縄もそのときに立ち寄った。そして東京オリンピックの始まる直前、聖火とほぼ時を同じくして東京に帰り着いた。

II. ベトナム

立ち寄った国の中にはベトナムもあった。アメリカがベトナム戦争を始めたのはケネディ大統領のときだが、ジョンソン大統領になってからアメリカの攻勢は一段と強まり、北ベトナムへの空爆も始まっていた。当時のサイゴン、今のホーチミンは至るところに鉄条網が張られ、バリケードがあり、戦車が街角に潜んでいた。その一方、アメリカ兵のためにあちこちにバーがあって、昼間から女性の嬌声が絶えることはなかった。重い緊張感と、やけの放埒が同居していた。

さて、いろいろな経験をして帰国したもの、当面することはない。赤十字とご縁ができたこともあるし、島津日赤社長を父親が存じ上げていたので、しばらく赤十字で働かせてくださいとお願いしたところ、給料が払えないからボランティアでどうかと言われた。結局、数か月後に職員に採用はされたが、当時の日赤は貧乏で、安月給はともかく、配属された外事部の国際活動の予算はほとんどゼロに近いのには驚いた。仕方がないから勝手に自分で金や物を集めて出歩き、そのときに築いた人脈は今日に至るまで役立っている。

入社数年後の1967年に、再び南ベトナムを訪れる機会があった。そこにさっきの青木大使がおられた。ベトナム戦争の解決に向けて日本がイニシアチブを取るべきというのが大使の持論で、その手足として赤十字を使いたいと考えておられた。それでジュネーブ大使という外交官のトップクラスの高いポストを捨て、敢えて南ベトナムの大使になっておられた。奥様がとてもついていけないと、ついには離婚してしまわれた。

青木大使のジュネーブ時代からの信奉者であった毎日新聞の記者も、特派員としてサイゴンに来ていた。彼は、私がサイゴンに来て、いよいよ日本政府が赤十字を動かして和平に向かって動き出すと感じたらしくて、翌日の毎日新聞の1面にそのような記事が出たこ

とを帰国して知った。私は入社数年のぺいぺい、そんな奴が勝手なことをやりやがってと冷やかな視線に晒されただけで全く社内的な反応はなかった。ベトナム情勢は日一日と悪化の一途をたどり、1968年に入って解放戦線によるテト攻勢があり、それをきっかけに和平交渉が始まる。だが、それがまとまるまでにはそれから5年もかかっている。

1975年、和平の合意を破って、今度は北ベトナムが南ベトナムに侵入した。アメリカ軍はついに耐えられなくなり、4月下旬から撤退作戦が始まる。何万人というアメリカ軍兵士を始め、アメリカ寄りだった南ベトナムの軍人、政府関係者、民間人たちが、一斉に逃げ出さざるを得なくなった。アメリカ軍は沖合に空母をとめて、そこにヘリでピストン輸送するが、とても追いつかない。

当時、南ベトナムの赤十字の社長はトゥルンさんという薬剤師で私は親しくしていた。非常に献身的な人で、トラックに乗って解放地域にも入り、上半身裸になって自ら救援物資を配るような人だった。そのため、政府からも解放戦線の側からも一目置かれ信頼を得ていた。家族は皆フランスへすでに移っていただけども、自分は最後まで残って赤十字の使命を果たすと頑張っていた。アメリカと交渉して、最後のヘリコプターで自分は避難をするつもりだったようだが、その当日、連絡の行き違いから取り残されてしまった。彼の活躍を知っていた統一ベトナムの赤十字は彼をボランティアとして残した。数年後にはフランスに移ることを許されて家族と一緒に、フランス赤十字のスタッフとしてしばらく働いていた。

その後の消息を私は知らないが、彼の活躍を通じてこうした状況の中で赤十字が中立、政府からの独立、支援の公平性を保つことがいかに難しいかを目の当たりにしたような気がした。そうした現実の中でも頑張っている赤十字人がいるということは大きな励みであり誇りにもなった。

ベトナム南北が統一した結果、ボートピープルが大量に発生し、日本にもその年にすでに126人、その後毎年増えて一時は1年間に1,000人ぐらい来るようになった。当初はもっぱらカリタスジャパンがその受け入れに当たっていたけれども、だんだん余力がなくなってきた。そのとき、ジュネーブで親しくしていたUNHCRの友人が日赤でも受け入れてくれないかと電話をしてきた。社内ではそれまで全く議論されてこなかった。経験もなく日赤だけでは対応しきれないので、私は立正佼成会、天理教、救世軍にもお願いをして、一緒に受け入れることにした。日赤は5か所の受入施設を開設した。1989年までに、日本全体では1万人を超える難民の受け入れが行われ、うち3,500人弱が日本に定住した。

ボートピープルの多くは、ベトナムの周辺国にも命

からがらたどり着いた。マレーシアは彼らを絶海の孤島に隔離したが、連盟はマレーシア赤新月と協力してその支援に当たり、日赤からも代表が派遣された。私も、その受け入れ状況の視察でこの島を訪れたことがある。

III. カンボジア

カンボジアもフランスの旧植民地。1954年にディエンビエンフーの戦いで、フランス軍が大敗し、和平交渉がまとまってフランスは撤退をした。それまでカンボジアもベトナムも、ベトミンが強い影響力を行使していたが、それを機会にベトミンもカンボジアから去った。1955年にはシアヌーク国王が退位をし、自ら政党を立ち上げたが、政治的対立がだんだん激化し、1963年には、ポル・ポトが中国の支援を受けてクメール・ルージュという解放戦線を立ち上げた。私は1966年、入社2年後に総理府が派遣をする日本青年海外派遣団の一員としてカンボジアを訪問した。カンボジアは当時全くの貧乏国で、商社マンもここでは売るのがなく、将来の発展性はないと言っていた。

政治の不安定が続いていた1968年に、私は再びカンボジアを訪ねた。エアフランスの飛行機は下からゲリラに対空砲火で撃たれるかもしれないと、ものすごい勢いで急降下をし、エンジンも止めないまま乗客は乗り降りをして、そのまま飛び去っていった。

その後もカンボジア情勢の不安定が続き、やがてアメリカと南ベトナムはカンボジアにも直接介入するようになった。それに対抗して、1975年にはポル・ポトの率いるクメール・ルージュがプノンペンを制圧して、民主カンプチアを立ち上げる。ポル・ポトは徹底した鎖国をし、外国人はことごとく追放されるが、そのときフランス大使館に集められた彼らを外国に送る役割を担ったのが赤十字国際委員会だった。国際委員会の代表も外国人と一緒に引き揚げたが、なぜ留まってその後の展開を見守らなかったのかと国際的に批判をされた。実際には、それは不可能だったのだが。

ポル・ポトが嫌いだったのは外国人だけではなくて、知識人、資本家、技術者、芸術家もそうだった。彼らは強制移住させられ、集団農場で働かされ、都市の住民は農村に移され苛酷な肉体労働の日々を送った。宗教はもちろん禁止、私有財産は没収、プライバシーは無視である。残っていた日本人女性7名のうち5名の方もこの間に亡くなっている。

カンボジアの赤十字は、ポル・ポトがプノンペンを制圧したときに理事会をやっていたが、14人の理事のうち13人は虐殺されてしまった。1人生き残ったのは社長のビルン女史だった。彼女はポル・ポトがインテリ大嫌い、外国かぶれ大嫌いということを知ってい

たので、とっさに眼鏡やペンを捨て、かわりに雑巾を拾って掃除婦だと偽って命拾いをした。それで命は助かったが、農村に下放され、素性がバレないかを毎日心配しながら数年を過ごした。

クメール・ルージュの下で苛酷な政策がとられ、多くの人々が殺されているというニュースはおぼろげに伝わってはいたが、当時、ASEAN諸国、日本、西側のほとんどの国がクメール・ルージュを支持していたので何も言わなかった。ベトナムが最後はポル・ポトを追放したけれども、今度はベトナムがさらに支配地域を広める挙に出ることが心配された。ドミノ現象で次にはタイが共産化するのではないかと言われていたので、私がタイで偉い軍人の方に出会った際に、どう思いか聞いたところ、確かに国境からタイのバンコクまではわずか200キロ。ベトナムの戦車だったら数時間あれば来られるでしょう。しかし、郊外から中心街までは簡単じゃない。このトラフィックジャムを見てくださいと笑っていた。そんなのきなことを言っただけけれども、ベトナムは大変恐れられていた。

カンボジアの赤十字は、ポル・ポトから解放されてから生き残ったビルンさんが社長に復帰し、事務総長にはミー・サムディという、日本に2年ぐらい留学をしていたドクターが就いた。彼の話では、ポル・ポトはインテリである医師のほとんどを粛清の対象とした。しかし、全部いなくなってしまうと困るので、500人いた医師の中から専門分野ごとに数人ずつ残したので約1割となった。薬剤師は54人いたのが15人に、歯科医は33人がゼロに、看護師は425人から50人に減ってしまった。かろうじて生き残ったミー・サムディさんが、ベトナムとの国境に近い寒村に送られた。夜な夜な幹部が集まって奴をそろそろ始末しようか話しているのが聞こえてくる。そのような折、たまたま幹部が病気になる、手の施しようがないので、洪々ミー・サムディさんに診てもらったら治ってしまった。それでそのときは命拾いをしたが、それでもいつ殺されるか分からない。そして、いよいよだめかと思われた矢先にベトナム軍が入ってきて救われたそうだ。彼にベトナムのことをどう思うか聞いたら、好きとか嫌いとかいう以前に、ベトナムが来てくれなかったら自分を含め、さらに多くのカンボジア人が亡くなったのではないかと答えた。解放後、彼はフランスにいる家族からフランスに来るように度々言われたが、カンボジアに留まることを決めた。自分は年寄りだ。カンボジアの伝統を継ぐ知識層、文化人はほとんど殺されてしまった。そこに、自分のようなわずかな生き残りまでが母国を捨てて海外へ移ってしまったら、クメール民族の将来はなくなってしまう。子供たちはみんなすでに落ちついているのだから、自分はここで生涯を終えるといって残られた。数年前に亡くなったのは惜しまれる。

実は、ポル・ポトが追放された直後、私はある新聞記者の手引きでカンボジアに入った。首都プノンペンには全くのゴーストタウンで、広いメインストリートには車とか、テレビとか、冷蔵庫とか、いわゆる文明の利器が破壊されて山のようにうず高く積まれていた。ホテルのエレベーターも壊されて動かない。宿泊した8階ぐらいのホテルの上階には階段で上り下りしないといけなし、鍵はことごとく壊されていて閉まらない、電気もつかない。貨幣経済は否定され、物々交換で経済は成り立っていた。私の同行者が、よき時代のクメール音楽を録音したカセットテープを持っていたのでロビーで流したら、人々が寄ってきて涙を流し、自然に踊り出し、その踊りは朝まで続いていた。彼らは5年近いポル・ポトの暗黒時代にはクメール音楽を一度も聴くことがなかったそうだ。

日本に帰国して大変な状況を伝え、カンボジアを支援しようと提案をしたが反応は芳しくなかった。情報がなかったせいで、当時は日本政府も含めてまだクメール・ルージュをサポートしている人たちが圧倒的に多かった。リベラルで知られた政治家までもがそうだった。私がカンボジアから帰って、カンボジアへの支援を訴えているのを知り、ベトナムの傀儡の手助けをするのかと聞いて、その方が日赤本社にどなり込んでこられたこともあった。

やっとのことで、救援物資を送ることが決まったが、今度は輸送手段がない。丁度ある商社がポル・ポト以前にユニセフのために買った車数十台を、送る方法がなくて持て余していた。そこで、一緒に方法を考えていたところ、リベリア籍、フィリピンの乗組員、台湾の船長と、何とも怪しげな3,000トンぐらいのおんぼろ船が1隻カンボジアに行ってもいいと言っているというので、この船にユニセフの車数十台と日赤の物資を積んで送り出した。これがおそらくポル・ポト追放後、最初の日本からの援助になったと思う。商社にも非常に喜ばれ、その担当者は社長表彰まで受けたそうだ。私はその支援の成果を見るためにしばらくしてカンボジアを再度訪れた。今度は地方のあちこちを回った。そこでは、キリング・フィールドと言われたポル・ポトの残虐行為の現場をあちこち歩かされた。ごろごろ転がっている白骨死体は考古学の発掘現場みたいで大して気持ち悪くはなかったけれど、井戸から引っ張り出して並べてあった遺体は洋服を着たまま黒髪が付いたままの骸骨は何とも薄気味悪かった。そういう現場を何か所も見てから、夜はフランス時代からの知事の公邸だったという瀟洒な建物で休むことになったが、荒れ果てていて電気はつかない。ろうそく1本に蚊帳がつってあって、お休みくださいと言って案内の人は消えてしまった。廢墟の中の漆黒の夜に亡霊がいつ出てきてもおかしくなく、一睡もできなかった。亡霊では赤十字のマークも通用しない。

私は残虐行為の行われた刑務所を訪ね、拷問の跡、地のりがべったりついた床、そこで殺された人の無数の写真、壁一面に積んである骸骨、そんな現場も見せられた。時を経てポル・ポトの起こした色々な人道的な問題についての検証も行われた。ところが、150万人の人が殺害され、ほとんどの人が苦痛を強いられたというのに、それから数年後に行ってみると、カンボジアの人は全くそんなことがなかったかのようにのんびりと暮らしていた。国際社会は特別の刑事法廷を設けてポル・ポトの犯罪を裁こうとしてきたが、その成果はほとんどこれまで上がっていない。カンボジアの人たちは、その暗い時代の出来事をひたすら忘れたいために一切封印してしまったのだろうか。

IV. バングラデシュ

色々で厳しい時代の話をしているうちに時間がなくなってきたが、もう一つバングラデシュの話をしてしようと思う。1970年に大きなサイクロンがあって、30万人もの死者が出たからだ。当時、バングラデシュはまだ東パキスタンと言われていた。東西のパキスタンは1,800キロぐらい離れていて、人種も言語も異なるが自治権拡大の運動がずっと続いていた。そんな中で大きなサイクロンが発生し、西パキスタンの対応が悪かったために、自治権拡大の運動は独立運動に変わり、やがて国内紛争に発展する。マイノリティーのヒンズー教徒の多くは避難民となってインドに逃げ、その支援も赤十字の大きな活動になった。

赤十字の役割は、インド、東パキスタン双方の難民や避難民の救援、貧国の上、紛争によって一段と悪化した食料や医療事情の改善、捕虜のジュネーブ条約に基づく保護等があったが、赤十字国際委員会が救援活動の中心となった。それに加えて、サイクロンの後始末も大変で、それには国際赤十字・赤新月社連盟が窓口となった。日赤は1972年からサイクロンの後始末と、国内紛争の後始末の両方を兼ねて、医療社会栄養補給班を派遣した。私もその一員としてベンガル湾の小さな島に3か月ほど滞在した。最貧国の中の最貧地域というところで、病院はない、医師はいない、医師がいたとしても薬がない、そういう状況であった。

もともと無医村地帯なので、どんな病気もあるが、持っている薬は限られているし、検査しようにも道具がないから、医師であっても看護師であっても我々素人でもやれることはほとんど同じだった。多いときには1日800人ぐらいの外來患者が来て長蛇の列ができたが、カースト制度の強い国なので、偉い人が割り込んできて、早く診察しろと行って騒ぎ出す。そういう中で公平性を保つのがいかに難しいかを痛感した。

救援物資を配るついでに衛生教育もし、健康の敵、蚊、ハエ、ゴキブリをやっつけて赤十字から賞品をも

らおうというキャンペーンを行った。最初は何で蚊やハエが悪いのか、彼らには分からない。子供たちがまず納得をして、瓶にいっぱいハエや蚊を詰めて持ってくるようになった。それにご褒美を渡すわけだが、あつという間に賞品がなくなってしまったので、キャンペーンは間もなく中止した。それでもこれを行うために、それまでなかった青少年赤十字の組織をつくれたのは収穫だった。

サイクロンについては、防災にもっと力を入れるべく、連盟と協力してサイクロン対策計画を始めた。気象レーダーがバングラデシュに当時1つしかなく、警報が出ても住民に伝える方法がなかった。そこで、日本でまだ出たばかりで高価だったソニーのトランジスターラジオを2,000台ほど送り、さらに末端の住民に伝えるためにサイレン付のメガフォンも送った。そしてボランティアを募ったが、トランジスターラジオとメガフォンを持って住民の防災教育に当たるボランティアは格好良く、若者の憧れとなった。問題は、ほとんどが海拔数メートルの低地なので、警報を流したところで避難のしようがない。高波が来たらひとたまりもないので、土を盛って高台を作りシェルターにした。我々のチームが作ったシェルターに政府が関心を持ち、すぐに238個の同様のシェルターを作ることが決まった。最初のシェルター作りには、多いときには1日3,000人ぐらいの労働者が関わった。頭の上に土を盛ったざるを乗せて運び、掘ったところの容積をはかって賃金のかわりに救援物資を配った。救援物資をただ配るのでなく、何かの見返りに救援物資を配るフード・フォー・ワークで、今では普通に行われている。

丁度その時期、天然痘撲滅をWHOが一生懸命やっていて、責任者の蟻田医師がバングラデシュにやって

こられた。天然痘は撲滅寸前まで行っていたけれども、アフリカの数か所とバングラデシュだけが最後に残っていた。そこにある日、よりもよって我々が活動しているハチャ島で天然痘の発生が報告され、500人ぐらい感染者がいるという。蟻田先生がジュネーブから飛んでこられ、我々のチームも呼び出されて天然痘の診断の仕方、天然痘とチキンポックスの違いの説明を受けた。ところが、我々のチームのドクターもナースも天然痘を見たことがないし、治療のしようもないという。それならと、私ともう一人の素人の同僚がジープで島中を巡って調査した。患者を遠くに隔離して住民は怖がって近寄らない。我々は怖いもの知らずだから、写真と見比べて、これはチキンポックスなのでこれを飲んで元気になりなさいとビタミン剤を渡して帰ってもらう。幸い一件も天然痘はなかった。

V. 終わりに

紛争の犠牲者の救護、難民・避難民の救援、医療・食料支援、それに災害対策と、包括的に対応しなければならなかった。そこでの幅広い経験はその後色々と役立った。おそらく第2次大戦後、大規模な複合危機に赤十字が深く関わったのはこれが最初であり、そのときの経験をもとに、その後、私を含め赤十字運動を担ういろいろなリーダーが育っていった。

お話ししたいことはまだまだたくさんあるが、それは次の機会に譲るとして、こういう不測の事態であっても赤十字の持っている「中立」「独立」「公平」といった原則を大切にしながらいかに対応するかを、職員一人ひとりが日ごろから考えておかなければいけない。そんなメッセージをお伝えして話を締め括らせていただく。